



## 第2章

# 美濃平定と天下布武

永禄10年(1567)～永禄12年(1569)  
【信長 34歳～36歳】

## 第2章

# 美濃平定と天下布武

永禄10年(1567)～永禄12年(1569)

## 【信長 34歳～36歳】

永禄 10年(1567)	34歳	いなばやま 美濃稻葉山城を攻略
		いのくち 町の名を「井口」から「岐阜」に改名
		せいかう 楽市楽座制札を出す
		「天下布武」印を使い始める
		娘を徳川信康に嫁がせる
永禄 11年(1568)	35歳	あしかがよしあき りゅうしょうじ 足利義昭を立政寺に迎える
		足利義昭を奉じ上洛
		義昭15代将軍に就任
永禄 12年(1569)	36歳	ほんこくじ 三好三人衆らが京都本圀寺にて義昭を包囲
		信長急ぎ上洛し三好軍に勝利
		足利義昭の新邸・烏丸中御門第(旧二条城)を造営
		きたほたけ 北伊勢に侵攻し北畠氏を攻略
		北畠氏による和睦要請により、
		次男信雄を北畠氏の養子とし家督を譲ることで和解

## 2-1 稲葉山城攻略

信長は天下平定を目指す拠点として、美濃国の支配を推し進めます。永禄10年(1567)、信長は稻葉山城を攻略し、この地の名を「井口」から「岐阜」と改名しました。

### 稻葉山城の歴史

稻葉山城は1200年頃、鎌倉幕府の重臣二階堂行政が稻葉山に砦を築いたのが始まりとされています。15世紀中頃には、美濃守護代・斎藤利永がこの城を修復して居城としました。大永5年(1525)、斎藤氏の家臣であった長井氏が稻葉山城を乗っ取り、斎藤道三、そして、その子義龍へと跡を継いでいきます。以降、美濃国を取り巻く情勢はめまぐるしく変わっていきます。

### 信長の岐阜城入城

永禄7年(1564)2月、この時の稻葉山城城主斎藤龍興は、家臣であった不破郡菩提山城主竹

中重治の謀反により、一時城を占拠されます。龍興は城を捨て鵜飼山城(岐阜市御望)へ逃げますが、その後稻葉山城を奪回します。

永禄9年(1566)、美濃国境に向かって出陣してきた信長は、葉栗郡河野島で斎藤方と対陣しますが、川の増水により、撤退を余儀なくされます。その翌年(1567)、斎藤方の有力家臣である西美濃三人衆(稻葉良通・氏家直元・安藤守就)が織田方に寝返ったことを機に、信長は稻葉山城に攻め込み、龍興を伊勢長島に敗走させます。こうして、信長は稻葉山城を開城させたのです(稻葉山城の戦い)。

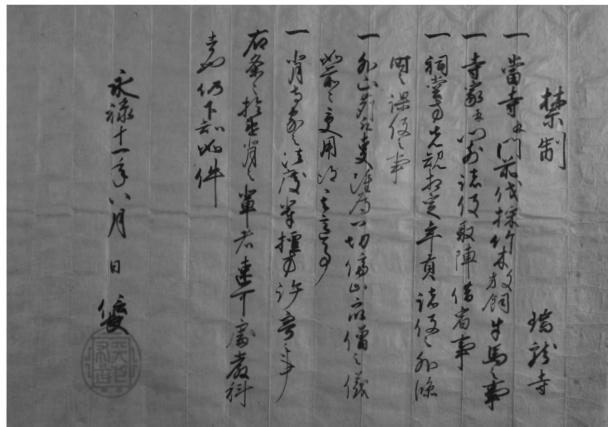
信長は、居城を小牧山城から稻葉山城に移し、ここを天下統一の拠点としました。この時、城「稻葉山城」と町「井口」の名を「岐阜」と改めました。「岐阜」の名は古代中国で周王朝の文王が岐山によって天下を平定したのに因んでつけたともいわれています。

瑞龍寺山から見た岐阜城



## 2-2 「天下布武」

永禄10年(1567)、岐阜城を主城にして、尾張・美濃の2か国を領する大名になった信長は、  
澤彦宗恩から与えられた印文「天下布武」の四文字を彫った朱印を使用するようになります。



織田信長朱印状(瑞龍寺蔵)

### 「天下布武」の「武」

信長が朱印として使用した「天下布武」という言葉は、沢彦宗恩が選んだとされています。その意味は、朝廷や宗教勢力を廢した武家による天下の一元統治と考えられていますが、その他にも中国の古典に由来する以下のような解釈もあります。

「天下布武」の「武」は「戈(ほこ)」と「止」という字からできています。戈つまり武器を止めるという意味です。そして、中国の古典『春秋左氏伝』(孔子があらわした『春秋』の注釈書)に、次のような記述があります。

「武とは、乱暴な者をおさえ【禁暴】、武器をおさめて戦争をやめ【戢兵】、大国を保有し【保大】、手

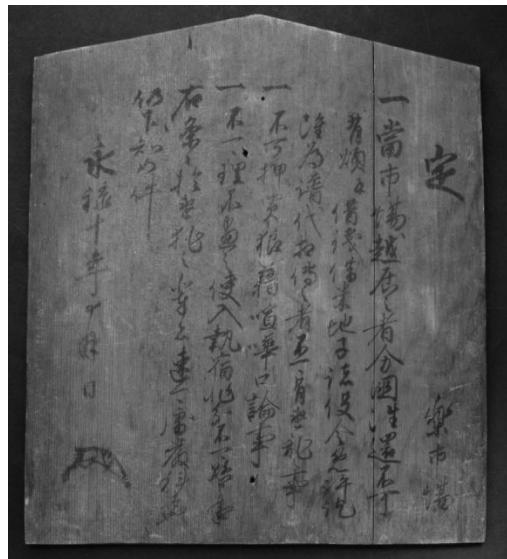
柄をたて【定功】、民を安らかにし【安民】、万民を和ませ【和衆】、物資を豊かにして生活の安定をはかる【豊財】という七つの徳を持つものであり、その七つの徳を持つものが国を治める」

現在発見されている信長の朱印状で最も古いものは、永禄10年(1567)11月に家臣坂井利貞にあてたもので、信長が美濃を平定したすぐ後のものになります。

おおぎまちてんのう  
美濃平定直後、信長のもとに正親町天皇の意を伝える文書が届きます。そこには信長の武勇をほめたたえるとともに、尾張・美濃の天皇家の旧領の回復を求める内容が記されていました。さらに、誠仁親王の元服費用と御所の修理費用の無心についても記されていました。これに対し信長は、心得ましたという朱印状を出しています。

## 2-3 楽市楽座令

信長の政策で注目されるものに「楽市楽座」があります。楽市令が日本史上に初めて登場するのは信長が令を布くおよそ20年前とされますが、自らの領地だけでなく広い地域で本格的に実施したのは、信長が最初だといわれています。



信長が出した最初の楽市令(円徳寺蔵)

### 楽市令

信長が初めて楽市令を発給したのは、岐阜城に入城した永禄10年(1567)10月に、加納の「楽市場」宛てに出した3か条で、この楽市楽座の制札が円徳寺(岐阜市)に所蔵されています。

信長は自ら美濃国・加納、近江国・安土、近江国・金森に楽市楽座令を布いただけでなく、支配下の諸大名に命じ、各城下町で実施させました。

### 武家中心の 社会構築へ

中世の経済的利益は、座・問丸・株仲間によって独占され、商人の利益が公家や寺家に集中する仕組みが確立されていました。信長はこれまでの制度を改め、武家が中心となる権力の構図を実現するために、楽市楽座を設け、関所の撤廃を実行しました。武家の絶対的な領主権の確立を目指すとともに、税の減免を通して新興商工業者を育成し、経済の活性化を図ったとされています。

## 座の構成

「座」とは、平安時代から室町時代にできた、商工業の同業者の組合のこと。『座』に入っている商工業者は、貴族や寺社に税を納めるかわりに「せきせん関銭(通行税)や市銭などの免除」「市場の独占」「値段や営業などの協定」などの特権があります。

した。また、「座」に入っている商工業者の利益を守るために、商工業者の人数を制限したり、市場を独占したりするなど、新しい商工業者を排除し、商業の自由な発達を妨げていました。

楽座を明示することで、座に属していない人でも商売ができる、商人だけでなく農民が生産物を売ることもできました。市場を広く開放して市場を活性化することが目的でした。



円徳寺(岐阜市神田町6丁目24)

## 2-4 関所の撤廃

信長の経済政策では、楽市楽座令とともに関所の撤廃が挙げられます。関所を廃止することで、商業の活性化を図るとともに、公家、寺社の財源を断つことも考えていました。

### 関所の歴史

飛鳥時代の大化の改新における、改新の詔に「せきそこ関塞」を置くことが記されており、これが日本の関所の始まりと考えられています。東海道の鈴鹿関、東山道の不破関、北陸道の愛発関(逢坂関)の三関が畿内を防御するために特に重視されていました。

関所は公民の勝手な移動を規制するものでしたが、中世には、朝廷や武家政権、荘園領主・有力寺社などが独自に關所を設置し、關錢(通行税)を徴収しました。室町時代には京都七口關が設置され、京都に入るにはいずれかの關所を通行せざるを得ない状況となっていました。

### 信長の關所撤廃

人や物資の流通を阻害し、物価に大きな影響を与えていた關所を撤廃することは、民衆の強い要望でもありました。

信長も以前から、軍が京都へすみやかに移動できるように、また、物資補給のために流通を自由にすることが重要だと考えていました。また、關所が公家・寺社・土豪の財源となっていたこともあり、武家中心の社会を築くためにも關所を撤廃する必要がありました。

關所撤廃とともに、信長は道路の整備も行なっています。これにより交通がさらに便利になり、庶民の生活が安定するといった効果がありました。『信長公記』には、伊勢国の關所は旅人の悩みの種であったため全て撤廃し、永久に關錢を徴収しないように命じたと記されています。

この後、關所の撤廃は、信長の意志を継いだ豊臣秀吉により完成することになります。



## 2-5 当時の室町幕府と足利義昭



信長が稻葉山城を攻めていた時期に、京都では室町幕府の將軍足利義輝が襲撃され殺害されます。謀反を起こした松永久秀と三好三人衆(三好長逸・三好政康・岩成友通)は、異系の足利義栄を將軍に擁立します。義輝の弟義昭は、本家による將軍復活をめざして各地の諸大名に協力を要請していきます。

### 義昭、 仏門への入室

足利義昭は天文6年(1537)11月13日、第12代將軍・足利義晴の次男として生まれました。幼名は千歳丸。兄義輝との將軍をめぐる家督争いを避け、天文11年(1542)11月20日、仏門に入室し、法名を覚慶と名乗りました。

### 將軍家復帰への 転機

ところが、永禄8年(1565)に転機が訪れます。その年5月の永禄の変で、第13代將軍であった兄・義輝と母・慶寿院が暗殺されます。畿内において權勢を誇り、將軍を自由に操ることを画策していた松永久秀と三好三人衆らによるもので、覚慶も暗殺しようと企てますが、義輝の側近らの助けもあり、近江甲賀軍の和田惟政の下へ脱出し、同国の矢島を拠点とします。覚慶はここで足利將軍家の当主になることを宣言し、六角義賢や和田惟政とともに全国の諸大名に三好三人衆らを討伐して自らの上洛と將軍擁立に協力するよう働きかけました。ところが上杉謙信・武田信玄ら地方の諸大名は近隣諸国との対立、争いが絶えず、なかなか動くことができませんでした。



足利義昭肖像(東京大学史料編纂所蔵)模写

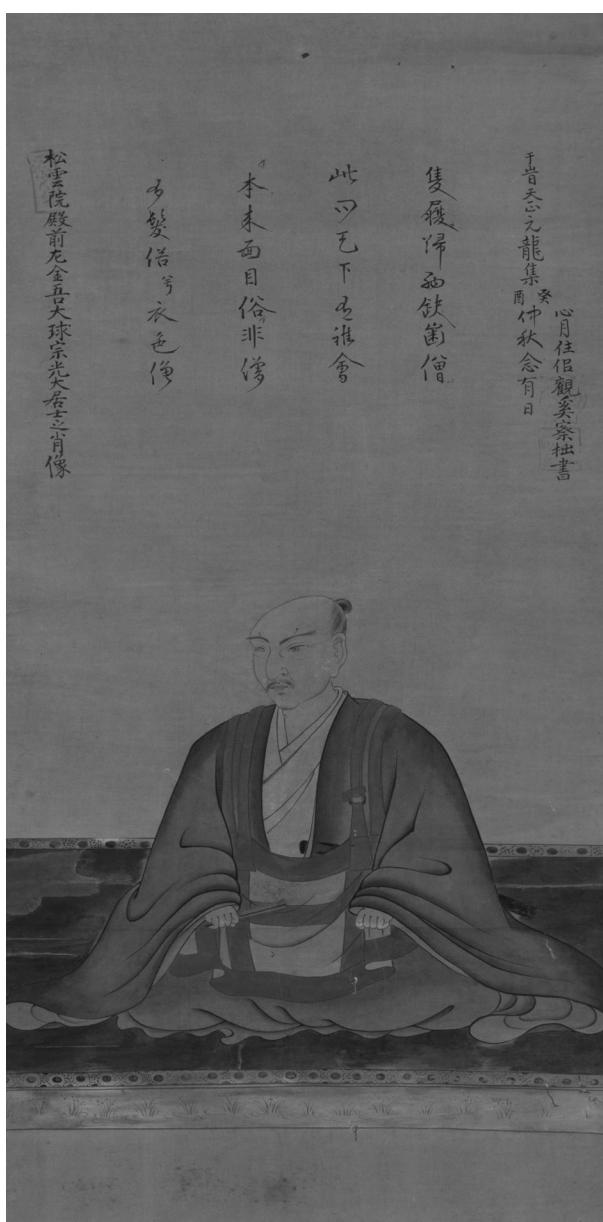
永禄9年(1566)2月17日、正統な血筋による将軍家を再興するため、覚慶は矢島御所において還俗し、足利義秋と名を改めました。さらに、4月21日には従五位下・左馬頭に叙位・任官しました。

しかし、この後、六角義賢の翻意により、義秋は近江から追い出されこととなつたため、朝倉義景を頼り越前国へ移り、上洛の機会を窺うことになります。

## 足利義栄將軍宣下

義秋は将軍家正統の血筋であり、幕府の奉行衆の掌握など有利な立場にあったにもかかわらず、なかなか上洛が実現しませんでした。三好三人衆が擁する足利義栄は、伊勢氏再興を約束するなど朝廷や幕臣への説得工作の結果、永禄11年(1568)2月8日に室町幕府第14代将軍の宣下を受け、就任しました。

これを受け永禄11年(1568)4月15日、義秋は「秋」の字は不吉であるとし、京都から前関白の二条晴良を越前に招き、元服式を行い義昭と改名しました。



朝倉義景肖像(東京大学史料編纂所所蔵)模写

## 2-6 義昭を立政寺に招いて上洛



あしかがよしあき

足利義昭は、信長の軍事的支援により京都に入り、室町幕府第15代将軍に就任を目指します。信長は義昭を將軍につけることで京都、畿内の秩序回復を自らの力で実現しようと決意します。

### 信長、 上洛へ動く

あさくらよしかいぎ  
足利義昭は越前国の朝倉義景のもとで、義景、上杉謙信、武田信玄ら、諸大名に上洛の要請を続けましたが、いずれも実行への動きを見せなかつたため、永禄11年(1568)本格的に信長に上洛の支援を依頼します。信長は義昭の要請を受け入れ、和田惟政、不破光治、村井貞勝、島田秀満らを越前に派遣します。義昭を美濃、岐阜城下の立政寺に迎え入れ、その際に銅錢1,000貫文

のほか、太刀、鎧、武具、馬などを献上しました。

信長は義昭との対面の後、上洛の途につきました。織田軍は尾張、美濃、伊勢、三河の四か国から動員され、その兵数は総勢50,000ともいわれています。岐阜を出発し、近江高宮で浅井長政と合流し、信長の妹で長政の妻、お市の方とも再会しました。織田軍は進軍を開始し、義昭を追い出した南近江の六角義賢・義治父子が籠る觀音寺城・箕作城に猛攻をかけ、落城させます。

信長は近江一国を平定し、美濃の立政寺にいる義昭を安土の桑実寺に迎え入れました。



立政寺(岐阜市西荘3丁目7-11)

## 2-7 畿内平定と義昭の將軍就任

足利義昭との上洛を進める信長は、近江国を治めた後、さらに京に向かって進軍し三好勢を駆逐し畿内を平定します。義昭は、信長の力で、本家の血筋を持つ幕府將軍となります。信長は、室町幕府の再興という建前を利用し、諸勢力を従わせていきます。

### 信長軍の 三好勢駆逐

永禄11年(1568)、安土の桑実寺に義昭を迎えた後、信長は守山の琵琶湖を船で渡り、大津の三井寺極楽院に入りました。その後、東山の東福寺に本陣を構え、三好三人衆の岩成友通が籠もる勝龍寺城を柴田勝家、蜂屋頼隆、森可成、坂井政尚が攻略すると、続いて山崎に兵を進め、摂津国芥川城の細川昭元、三好長逸を攻めて追い出し、これに応じる形で篠原長房の越水城、滝

山城も開城させました。

摂津(大阪府・兵庫県の一部)の国人も次々に信長方に応じ、伊丹城の伊丹親興、池田城の池田勝正、そして高槻城、茨木城も降伏していきました。

三好三人衆は、將軍足利義栄とともに本国の四国へと退去していました。また、この頃、病気を患っていた足利義栄が死去したといわれています。

大和の松永久秀、河内(大阪府)の三好義継も三好三人衆とは不仲になっていたので、信長に帰服しました。



信長軍の進軍経路

## 畿内平定

こうして畿内、隣国はすべて、信長の支配下となりました。

信長は足利義昭とともに芥川城に入城して本営としましたが、その間、大和國の松永久秀が名物茶器である「九十九髪茄子」を、また、今井宗久は、大名物の茶壺「松島」、茶入れ「茄子」を献上しました。それ以外にも、芥川に滞在した14日間は、各地に伝わる珍宝を持参し、信長に挨拶しようとする人々で門前がごった返す有様だったそうです。

畿内を平定した信長は、10月14日に京都に戻り、義昭が本匂寺に入った後、細川昭元の屋敷を義昭の臨時の御殿に定めました。このとき、義昭は狂喜し、自ら三献を与えるとともに、盃と刀を信長に下賜したといわれています。

## 將軍就任

永禄11年(1568)10月18日、足利義昭は朝廷から將軍宣下を受けて、正式に第15代將軍に就任します。同時に従四位下、參議・左近衛權中将にも昇叙・任官されます。

信長は、久我通俊、細川藤孝、和田惟政を通じて、義昭から管領・斯波家の家督継承、管領代・副將軍の地位などを勧められましたが、それを遠慮し、足利家の桐紋と斯波家並みの礼遇だけを賜ったとされています。

將軍に就任した義昭は、これまでの紛争で混乱してきた幕府内の体制を整理し、義輝暗殺や足利義栄を將軍に推した容疑で近衛前久を追放し、代わりに二条晴良を関白職に復職させました。



本匂寺(京都市山科区)

## 2-8 本圀寺襲撃事件

義昭が室町幕府15代将軍就任後も、その隙をついて、主権の奪回を狙うものは数々存在しました。14代将軍義栄擁立に失敗し、敗走していた三好三人衆は本圀寺の変を起こします。

### 事件発生の経緯

永禄8年(1565)、13代将軍・足利義輝を討つた三好三人衆は、永禄11年(1568)には義昭を奉じる織田信長の上洛軍侵攻により京都から阿波へ敗走しました。その後、信長と義昭の入京を許し、義昭が15代将軍に就きましたが、三好三人衆は、報復、巻き返しの機会を常に伺っていました。

### 信長美濃へ帰国

永禄12年(1569)、信長は、將軍義昭の仮御所としていた本圀寺の警護を、明智光秀を中心とする近江、若狭の国衆に託し、美濃へ帰国します。信長不在で、手薄となった畿内の織田勢の隙について、義昭を討たんと機会を伺う三好三人衆に、信長によって美濃を追われた斎藤龍興らが加わり、本圀寺を襲撃します。

### 襲撃開始

1月5日、三好軍が本圀寺へ攻め入ります。三好軍は5,000とも10,000ともいわれ、対する明智光秀らを中核とする織田・義昭方はわずか2,000で、本圀寺に立て籠もりました。軍勢の差からみても本圀寺の陥落は時間の問題と思われましたが、若狭国衆の山県源内らが奮戦し、三好軍の進入をかろうじて阻止します。

翌1月6日には、桂川河畔で再び三好軍と合戦に及び、織田軍が勝利を収め、本圀寺の変は収束します。

### 將軍御所造営へ

「本圀寺襲撃」の報を受けた信長は、直ちに岐阜から本圀寺へ向かいます。信長は、戦功のあった池田正秀らを賞したうえで、この襲撃を重く見て二条に將軍御所の造営を行うことを決定します。

## 2-9 伊勢北畠氏を攻略

信長は美濃を平定する頃から、伊勢侵攻を開始します。伊勢は尾張、美濃の南に接する地域で、京との通路、東海道が通る地であることから、信長の天下取りの重要な拠点でした。

### 合戦までの 経緯

伊勢侵攻を狙う信長は、伊勢国を支配する国司大名・北畠家と対立していました。北畠氏は、公家の一つで南北朝時代には南朝の忠臣であり、伊勢国に進出して南北朝合一後も国司として勢力を保ち、公家大名、戦国大名として伊勢を支配していました。その頃、北畠家の当主は北畠具房ともふさでしたが、実権は隠居した前当主・北畠具教とものりが握っていました。

### 開戦

永禄12年(1569)5月、具教の弟であり木造城こつくりじょう主の木造具政こづくりともまさが織田方の滝川一益の策略で寝返り、これに対抗する具教は、5月12日、木造城を包囲し攻撃します。具政には織田方からの援軍もあり、攻防は長引いていました。

8月20日、上洛戦を終えて美濃に戻った信長は、今が伊勢侵攻の機会と考え、総勢70,000の大軍で木造城に向けて出陣します。織田軍が着



大河内城跡(三重県松阪市)

陣すると北畠軍は、大河内城とその支城に籠城しました。このとき、北畠軍の兵数は約8,000で、圧倒的に織田軍が優勢でした。

8月28日、織田軍は城の四方に柴田勝家、羽柴秀吉、滝川一益、斎藤利治をはじめ、主要家臣を配置しました。大河内城を包囲し、総力を挙げて攻撃しましたが、意外にも苦戦を強いられます。

1ヶ月にわたる攻防の後、10月3日に信長の次男である茶筅丸(織田信雄)を具房の養嗣子とすること、大河内城を茶筅丸に明け渡し、具房・具教は退去することという織田方に有利な条件の下、織田家と北畠家は和睦に至りました。

## 戦後

この後、信雄は具教の娘・千代と結婚し、元亀3年(1572年)に元服して北畠具豊を名乗ることとなり、織田家と北畠家は表面上良好な関係を保っていました。

ところが、具教・具房は武田家などと通じ復権を画策します。結局それが信長に漏れ、天正3年(1575)、ついに家督を完全に具豊(信雄)に譲ることになります。さらに、信長の命により、天正4年(1576)11月、具豊が北畠一族を襲撃し殺害します。義父具教の子・具房は滝川一益によって幽閉されますが、天正8年(1580)に死去し、名門・北畠氏の嫡流は滅びます。

ただし、この時点では依然、具豊が北畠を名乗っており、千代との間には嫡子秀雄がいました。北畠姓がなくなるのは、本能寺の変後、具豊が織田姓に復姓し織田信雄と名乗ったときのこととなります。

## 2-10 幕府再興

ほんこくじ  
本圀寺の変以後、信長の指示の下、烏丸中御門第(將軍御所・旧二条城)の造営が進み、京における將軍義昭の環境が整っていきます。

### 鳥丸中御門第築城

永禄12年(1569)、本圀寺の変が起こると信長は、將軍義昭のために防備の整った將軍御所として烏丸中御門第の築城を進めます。この工事では信長自身が普請総奉行として現地で陣頭指揮を執り、約400メートル四方の敷地に三重の「天守」を備える城郭造の邸宅を建造しました。

二重の水堀、高い石垣など防御機能を格段に充実させたため、洛中の平城と呼んで差し支えのない大規模な城郭風のものとなりました。周辺からは金箔瓦も発掘されており豪壮な殿舎であったと考えられています。

この工事で細川氏一族の分家から、古来の大石「藤戸石」<sup>ふじといし</sup>が搬入されたとき、信長は「藤戸石」を運ぶ作業を派手な催しに仕立て、町衆を喜ばせ、人夫たちの志氣を高めたといわれます。

旧二条城跡地周辺



旧二条城跡地

### 將軍御所完成

信長は、築城を約70日という短期間で終わらせます。義昭が本拠を移したのは、その年の4月14日とされています。この義昭の將軍邸・烏丸中御門第には、室町幕府に代々奉公衆として仕えていた者や旧守護家など高い家柄の者が続々と参勤し、ここに義昭の念願であった室町幕府は完全に再興されました。

また、義昭の移徙から2日後、信長は禁裏御所の修築にも着手しました。工事には約1年を掛け、老朽化の進んだ御所の紫宸殿を檜皮葺から瓦に葺き替え、門の修理などを施しました。

この頃、信長は朝廷から副將軍の任官を勧められます。が、義昭の勧めに続き、これも辞退しています。



## 2-11 信長と幕府

信長にとって幕府とは、朝廷とともに、天下布武を実現するために利用できる存在でした。

### 信長にとっての朝廷・幕府

信長により発給された知行安堵の朱印状は、將軍義昭の下知や奉行人奉書を伴わないので発給されることもありましたが、知行分を長く確実に保持するためには、奉行人奉書と信長朱印状の両方が必要との考え方が根強かつたようです。

こうしたことから、京都・畿内支配やそれぞれの政権の存在において、信長と幕府は補完関係にあり、互いに否定・排除できない状態にあったといえます。

信長は天下を自己の武力で従え、天皇・公家・寺社に当知行分を保証し、幕府直轄領も回復して、朝廷・幕府によって実現される秩序を維持しようとした。しかし、幕府・守護体制を復活させ、諸国の幕府直轄領をすべて回復したり奉公衆(幕府の官職のひとつ)に再び力を持たせようと考えていませんでした。

形の上で朝廷を崇敬し、幕府を存続させて將軍を上位にいたたく形をとりましたが、それは、天皇が、公家はもちろん寺社や多くの上層武士の身分意識のなかで頂点にあり、天下静謐の重要な構成要素だったからです。しかし、朝廷が現実の政治においてまったく無力だったことから、信長は天皇・朝廷とともに「天下布武」を実現しようとは考えていました。

幕府は京都において、裁判権、検断権、知行宛行・安堵権をある程度行使することはできますが、信長の分国支配を否定しない存在でした。信長は京都を本拠地にするつもりも、自らが將軍になるつもりもありませんでした。將軍になってもそれだけでは全国の大名を従えることはできないとわかっていたからです。畿内平定を実現した後は幕府に任せて、自らは分国支配・分国拡大に邁進して全国を平定しようと考えていました。

## 2-12 天下布武の実現

信長は美濃を平定して上洛の条件がととのったとき、「天下布武」の朱印を使用するようになりました。そして、義昭を擁して上洛し「天下布武」が実現します。その後、「天下」の意味は拡大していきます。

### 天下の範囲

信長や当時の大名において、「天下」とは、自分の「分国」(領国)とは空間的に分けられた場所、すなわち京都のことだったようです。しかし、「天下」の使い方は一通りではなく、「京都、あるいは京都と五畿内」、「将軍自身」、「将軍が握っている幕府政治、将軍に象徴される秩序」を指す場合などがありました。

### 天下静謐

信長やその他の人々は、将軍就任、幕府再興には五畿内の平定、掌握が必要と考えていました。それが天下の範囲であり、信長の「天下布武」はまさに五畿内の平定を意味していて、ひとまずそれが実現したのだと考えられます。

それはまさに「天下静謐」ということでした。しかし、天下静謐は不安定であり、義昭襲撃事件に象徴されるように、引き続き信長の武力が必要でした。信長は義昭の御所を堅固に新築しその身の安泰も図りましたが、自身が幕府の機構の中に入ることはなく、義昭や天皇から要請のあった管領や副将軍就任を受けることはありませんでした。

幕府には天下静謐を維持する力はなく、信長の発言力、政治力が強まることになりました。

元亀元年(1570)、信長は五箇条の条書を義昭に承認させます。これにより義昭を監視下に置くとともに、天下の権限を委任させ、天下の采配のすべての権限を手中に収めます。

天皇・朝廷をないがしろにせず、将軍・幕府とともに京都で安泰に存在すること、それを武力で維持し、経済的にも支えることが、信長の天下静謐の基本的枠組みでした。

### 「天下」の拡大

信長は天下静謐を実現し、天下の支配を委任されましたが、それとは別に尾張・美濃・伊勢・南近江などを支配する大名もありました。その分国は「天下」に含まれず、義昭の介入するところではありませんでした。信長の戦争には、分国を拡大する戦争と天下静謐のための戦争の二種類があり、その二つは関連しながら展開していました。

この後、天正元年(1573)の義昭追放を機に、「天下」を意味していた五畿内が信長の分国となり、さらに、分国が拡大していくことで、信長の「天下」は全国を意味する語へと飛躍していきます。